『宿命』をめぐって（1）
-F．Mauriacの異教性（4）-

メタデータ	言語: ja 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島,公子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000146

明治大学教養論集　通巻571号
（2023・9）pp. 1–40

『宿命』をめぐって（1）
F.Mauriac の異教性（Ⅳ）

中　島　公　子

はじめに

今から 30 年近く以前のこと、農学部在職中だった稿者は、「明治大学教養論集」通巻 265 号（1994.3.22）、同 272 号（1995.1）、同 294 号（1997.1）に以下の論考を掲載することができた。

「シベールとアチス F.Mauriac の異教性（１）」

「シベールとアチス F.Mauriac の異教性（Ⅱ）」

「シベールとアチス F.Mauriac の異教性（Ⅲ）」

これらは、二〇世紀のフランス作家フランソワ・モーリヤック（François Mauriac 1885-1970）が 1940 年に Bernard Grasset 書店から出版した『アチスの血（Le Sang d'Atys)』と題する長編の詩作品に、「カトリック作家」の刻印を押されるこの作家の内面に根深く存在する「異教性」を見ようとする試みであった。

全体を四章に分け、

第一章　『嵐』について

第二章　キュベレー・アッチス神話とローマ時代の祭祀

第三章　リュリのオペラ『アチス』

第四章　ふたたび『嵐』について

の構成のもとに考察を進めるはずであったが、その後諸般の事情により、

第二章を終わったところで頓挫して今日に至っている。

副題とした「F.Mauriac の異教性」とは、先に触れた稿者のこの作家に対する多年にわたる関心の所在を示すものであって、大きくはこの主題のもとに、幾つかの小説作品や自伝的エッセイあるいは劇作品に到るまでの考察が進められてしかるべき題目なのである。

怠惰のゆえに途中で終わってしまったこの詩編に関する論考をまずは完成させるべきであろうことは十分承知だが、うかうかと高齢化を許したために、語らなくてはならないことが、ほかにも多々あるように思われてきた。物を書くという作業そのものがいつまで続けられるのかもわからない状態であることに気づいたので、断片的でもよいから、書けるだけのことを書いておこうという気持ちになった。敢えて未完の論考につづく「F.Mauriac の異教性（Ⅳ）」という副題を設けたのは、このような事情からのことである。

また「異教性」ということばについて、ひとこと言い添えたい。

モーリヤックとキリスト教、とくにカトリシズムとの関係の深さは、誰もが口にする通りである。とりわけ日本においては、遠藤周作や高橋たか子といった作家への影響を通じて、むしろ「カトリック作家」ということばはモーリヤックによって実体を与えられたとさえ言えるほどである。しかし一方で彼がカトリックの信仰に安住した作家でないこと、かえって信仰と文学の自律性のはざまに生き、彼自身の内面の葛藤を創作活動の源泉に据えたこともよく知られている。彼の創作活動の原動力は、キリスト教的倫理観からすれば明らかな「罪への傾き」とされるものであり、内面の葛藤とは一口に言えば、信仰と肉欲の相剋にあった、と言うことができる。

この作家の精神風土にわけいるために、キリスト教が提示する世界観や人間観を知ることはぜひとも必要だが、私たちのような、非キリスト教的文化の中で自我形成をした者にとっては、こうしたキリスト教的な観点からの解析が、必ずしも作品鑑賞の助けとばかりなるわけではない、ということも事実である。キリスト教文化の中で育った人間が血肉化しているそうした知識

を、われわれはそう簡単に内在化するわけにはいかないからである。

それよりも、稿者はこの作家の中に、意外とカトリシズム以外の、というよりもっと原始的野性的なもの、自然との深い交流や、生の荒々しい衝動のようなものを見出すことがあった。それはこの作家が思弁的であるよりも感覚的な作家であることによる。太陽に照らされる外の世界がわれわれの五感、特に嗅覚や触覚のような、意識から遠いところに及ぼす官能をこれほど生々しく描写する作家を稿者はあまりほかに知らない。モーリヤックの小説にある熱っぽさ、湿り気、地や人間の発する様々なにおい等は、彼の描く世界の大きな特徴である。

官能の作家だということは、肉体の作家だということである。彼はカトリック的な「魂」だけでなく、「肉体」を持つ人間を描くことに長けている。その人間は、動物や植物と同じ自然の一部である。その「生」のあり方、敢えて言うなら「異教的な」生のあり方は、稿者のような非キリスト教文化の中で育った人間にとっては、キリスト教的「生」よりも身近に感じられる。ここに描かれる「生」は、異教のもとに生きる私たちの「生」となんら変わりがないのである。

そしてモーリヤックの「神」は、彼の小説の作中人物たちがこうした「異教的な生」を生きる道程のとある場所に、突如姿を現す。だが、そのことに気づく者もあれば、気づかずに通り過ぎる者もある。小説構造の土台にある異教的な「自然」の世界は、「神」が現れたからと言って、その在りようを変えはしないのである。

しかしながらモーリヤックの場合、「自然」の実在性、その肉体的官能の確かさゆえに、だからこそ逆に、そこに現れる「神」の実在性が保証されている、ということもできるのではなかろうか。『テレーズ・デスケルー』において、神はクララ叔母さんの死を告げる下女の大声によって、毒を飲むためにコップに伸ばしかけたテレーズの手を払いのける。それは暴力的といってもよいほどの肉体的・物理的介入の仕方である。「神」は、この世にある

もの、とくに人を介して神の業を実行する。天上にあるよりも、地上、われわれの身近にいるようなあり方である。

それはモーリヤックの神が「人」となった神だからであろう。ナザレのイエスはまさに、異教世界ローマ帝国に生きる人間としての「生」を完璧に生き抜いた人物であった。そしてそのとき以来、いまだこの世に「神の国」は到来していない。とりわけニーチェに「神の死」を告げられてからの現代においては、人間は古代ローマ時代以上の異教的世界の真っただ中に生きている。現代のモーリヤック世界の土台に「異教性」があることは、当然の成り行きなのである。

今回および2回にわたって、そのようなモーリヤックの「異教性」を、『宿命』という作品構造の中に探ってみたいと考える。

『宿命』をめぐって（1）

『宿命（Destins）』とは？

フランソワ・モーリヤック（François Mauriac）が代表作『テレーズ・デスケルー（Thérèse Desqueyroux）』を雑誌 *“Revue de Paris”* に発表したのは1926年11月から1927年1月にかけてのことであった。その僅か2か月後、彼は別の雑誌に12章からなる小説を連載し始める。それが『宿命（Destins）』である。連載は *“Les Annales politiques et littélaires”* 誌上1927年3月30日から5月15日まで、単行本としての刊行は1928年2月、Grasset社からであった。モーリヤック42歳、小説家としての地歩を築いた中期の作品群の一翼をになう作品である。[1)]

のちに作家はこの作品について、*Les Annales* の主筆ピエール・ブリッソン（Pierre Brisson）の依頼に応じて「数日間でいともやすやすと書き上げた」と語っている。残されている草稿も、二転三転と書き直された『テレーズ・デスケルー』とはまるで対照的に、作中人物の性格や行動の筋道が最

初のプランのまま、「一気呵成に」書き上げられていったことを示している。[2] 孤独なテレーズの暗い内面の苦悩をひたすら追っていたモーリヤックは、もしかするとその一方で、息抜きのように、日に照らされる外の世界やそこに交錯する人々のシルエットに目を向けることがあったのかもしれない。そう思わせるほどに、ガロンヌ河沿いの高台の集落ヴィリディス（Viridis）の大地主ゴルナック家の、はるかに遠く大西洋べりの有名保養地アルカッションの方角をめざして葡萄畑と松林を同時に見晴るかすことのできる広々としたテラスは、ゴルナック（Gornac）家の献身的な嫁である初老の婦人エリザベート（Élisabeth）と、街道をはさんで領地を接する隣家ラガーヴ（Lagave）家の孫であるボブ（Bob）という美貌の青年をのせて、極暑の日ざしがかげったあとのひいやりとした風にさらされながら、あたかもはじめからそこにあったかのように自然に、音もなく小説の幕をあけるのである。

作者の視点の固定化

「幕」と言ったのには理由がある。それはこの小説の読者がはじめからおわりまで、まるで劇場の観客席にいるかのように、物語中の出来事や登場人物との間に、一定の距離を保ち続けることができるからである。この距離は読者に、安心して出来事や人物の心理に立ち会わせてくれる。『テレーズ』の場合のように、彼女の意識の闇や混乱の中に引きずり込まれて、読者自身が底知れない不安を味わう、というようなことがない。いわゆる写実派小説の常道として、19 世紀の巨匠たちが築き上げた「大道を持ち歩く鏡」の役割を、作者はきちんと守り、風景も建物も人物も、あくまで外側の風貌から描き出している。外には容易に漏らさない登場人物たちの心の襞も、周到なことば運びによって、物体のような堅牢さを伴って読者に届けられる。

だが、こうしたいわば「古典的」な手法は、じつをいうとフランソワ・モーリヤックという作家にしては、かなり珍しいものだと言うことができる

のである。

有名なJ.P.サルトルのモーリヤック批判「フランソワ・モーリヤック氏と自由（M.François Mauriac et la liberté）」[3] は、モーリヤックが、作中人物を描写する視点をその人物の内と外にたえず移動させている点を非難する。「小説中の人物は彼らなりの掟を持っている。そのもっとも厳しいものは、小説家は人物の目撃者となるか共犯者となることはできようが、決して同時に両者にはなり得ない、ということである。内部か外部か、この掟に注意しなかったためにモーリヤック氏は作中人物の意識を殺しているのである。」[4]

作者の視点の移動というこの特質は彼の小説作法の根底にあって、サルトルの批判にも拘わらず、むしろモーリヤックの多くの作品の魅力を形作っている。そのもっとも成功した例が『テレーズ・デスケルー』であることも異論のないところであろう。

稿者は今から六十五年前、日本フランス文学会の1958年春季大会において「『テレーズ・デケイルー』の回想形式」と題する研究発表を行い、この「視点の移動」がどのような文体的技巧による表現を得ているかを、この作品に即して検討してみたことがある。[5]

構造の観点から、

1）時間的視点の移動

2）話者の視点の移動

の二つに分け、1）では、夫殺しの嫌疑から「不起訴」になって放免されたバザスの裁判所を出て、ベルナールとクララ叔母さんが待つ「地の果て」アルジュルーズへ、馬車と汽車を乗り継いで帰っていくテレーズが、回想によりよみがえる過去の時間の流れと、乗り物にゆられる現在の時間の流れの双方に身をまかせ、過去と現在、外的な現実と内面意識を交錯させながら、事件の経過を思い出していくことを取り上げ、そのために作者が、文を構成する動詞の叙法および時制をいかに巧みに駆使しているか、を分析の対

象とした。2）では、いわゆる話法の問題に着目し、作者が「直接話法 style direct」「間接話法 style indirect」「自由間接話法 style indirect libre」の三つの型を使って、作中人物の内部思考を、内的告白（monologue intérieur）の状態から、人物自身にも知られていなかった深層にまで踏み込んで映し出すだけでなく、人物を描出する作者自身の内部思考までもそこに引き出し、織り交ぜ、敢えてそれらのすべてを同一平面上におくことによって、逆に心理よりさらに深奥にひそむ「魂の現実」ともいうべきものの次元に達し、その実在にふれようとしたことを観察した。

『宿命』という作品において、これらモーリヤックの好む技法が用いられていないのか、というと、決してそんなことはない。先ほど主人公として紹介したエリザベートにしてもボブにしても、また彼らの家族たち、エリザベートの介護のもとに荒廃した館に住む舅のジャン・ゴルナックやボブの祖母のマリア・ラガーヴ、またパリに出て、ヴァノー街のアパルトマンに住んでいる（ボブも本来はそこに住む）ボブの父母オーギュスタン・ラガーヴ夫妻にしても、その外貌から生まれ育ち、性癖、好み、そして心の裡まで描き出すために、作者は上記の文体上の諸技巧を心行くまで駆使してはばからない。それはこの小説の第１章と第２章を見ただけで明らかである。

この小説はまず突然「風が冷たいわね。マント持っていないの、ボブ？それじゃ、わたしのを持ってきてあげるわ」と言う女性の直接話法のセリフによって始められる。それにつづいて、対する青年が、いや僕は暑くてたまらないのだと（間接話法で）答え、それでもなお彼はエリザベート・ゴルナック（ここで女性の名前が出てくる）をひきとめることはできなかったことが、作者による地の文章（narration）で示される。この文は引き続き館に向かって足早に急ぐ彼女を描写したあとで、「ぼくはそんなに重症じゃないんだけどな」と言うボブの呟きを直接話法で示す。この二つのセリフを発する二人の人物には同時に、酷暑に枯れはじめた菩提樹の並木や干上がった道路と同様、小太りの体躯を支える年齢に似合わないすらりとした脚を持つ

女性と、伏し目がちな表情で、近づく者をすべて魅了する、長い濃いまっすぐなまつ毛を持つ青年という、肉体的特徴に支えられた堅牢なイメージが与えられている。

そしてエリザベートがマントを持ってテラスにもどってくるまでの間に、作者は、館の中に寝ている老人ジャン・ゴルナックが、前世紀末、第３共和政の成立とともに反教権主義者となり、王党派だった父親の持ち株を処分して、土地に変え、葡萄と松の栽培によってさらに土地をふやしてランドの大地主となって行った経緯を日付まであげて紹介し、さらに彼がその保護者を自任する、隣家のオーギュスタン・ラガーヴという人物について、その人物が若い頃神学校で将来を嘱目される好成績を修めながら、ジャンの指図に従って法衣を捨て、パリに出て下級ながら官僚となる道を選んだこと、そしてその出世をランドに残った母親のマリアが、ゴルナックに対していかに感謝しているか、といったことを通じて、このフランス西南部のかつては荒地であった地方が創り出した20世紀初頭の階級社会形成の一端を、バルザック流の筆致で克明に描き出しているのである。

テラスにもどってきたエリザベートからマントを着せてもらうボブが、そのオーギュスタンの息子ロベール・ラガーヴであることが明らかとなる。この美貌の青年は肋膜炎の回復期を祖母のマリアのもとで過ごすために、15年ぶりにヴィリディスに滞在している。エリザベートは彼が赤ん坊の頃、お守りをしてやったことをはじめ、幼時からの付き合いであるため、青年をボブという愛称で呼んでいるのだ。

構造的に言うと、エリザベートとロベールのいるテラスの場面に、ゴルナック家とラガーヴ家の過去が入れ子構造の形で挿入されているのだが、それが読者にとってまことに自然に受け入れられるのは、地の文章（narration）をもとに多様な文体を組み合わせる作者の巧みな技法の故であると言ってよいであろう。

第２章も同じ入れ子構造によって、こんどはパリのヴァノー街のラガーヴ

家に話が移り、秀才ぶりを鼻にかける父親への反発から、月給取りのコースを拒否して、新興職業であるインテリア・コーディネイターの途をえらんだボブの、家族とはほとんど顔を合わせない日常と、時々大挙してそのアパルトマンの階段に現れ、騒音に近いけたたましい会話を交わす、彼の友人とも顧客とも取り巻きともつかぬ外国人の金持ち集団が紹介される。

だがこの章の終りの個所でボブと会話するのは彼の母親である。そして父親が一度だけそのうしろ姿を目にしたことのある育ちのよさを感じさせる少女が、やはりランド出身の貴族ド・ラ・セスク家（エリザベートの実家とは遠縁にあたる）の令嬢であって、ボブが15年ぶりにヴィリディスで病気を治そうとしたのは、アルカッションの別荘へひとり自動車（くるま）を駆って行く彼女をヴィリディスに立ち寄らせ、そこで彼女と会いたいという願望の故であることが、この母親との会話から知らされる。

そして第3章の冒頭、舞台はヴィリディスのテラスに戻り、ボブは地平線の彼方を指さしながら、エリザベートに「アルカッションはあの向こうですね？」と、確かめるのである。

文体的技巧はこのように十二分に発揮されている。モーリヤックはモーリヤックであることをやめてはいない。『宿命』は明らかに『テレーズ・デスケルー』の作者の作品である。

にもかかわらず、『宿命』を読む者が『テレーズ』を読むときの不安から解放され、安心して登場人物たちに付き合っていられるのは、なぜだろうか？ それは『宿命』における作者が完全に人物の背後にかくれ、彼ら登場人物自身の動くまま、話すまま、喜怒哀楽を示すままに、そのドラマを読者に目撃させようとしているからに他ならない。この作品においては、作者の視点は移動せず、固定しているのである。作者は読者の目の届かないところに、しかしはっきりとした視座を占めている。登場人物の目撃者であり、同時に共犯者でもあることに変わりはないが、この視点の固定化によって、登場人物と読者の間に、一定の距離を置くことに成功している。言い換えれ

ば、この作者は劇作品における脚本家、演出家のような位置を占めている。ということは、『宿命』が劇的な構造を持っているということにつながるのである。

『宿命』の古典劇的構造

この作品にフランス古典悲劇の構造との類似を読み取ることは、幾人かの批評家、研究家の指摘するところである。中でもプレイヤード叢書のモーリヤック作品集の監修者であるジャック・プティ（Jacques Petit）は、同作品に付された解説において、モーリヤックがこの作品の執筆中、ほぼ同時並行的に取りかかっていた『ジャン・ラシーヌの生涯（La Vie de Jean Racine）』が与えた影響の大きさを指摘している。[6] エリザベートがボブに抱く感情に、ラシーヌの代表作『フェードル』のテーマが模写されている、と言うのである。フェードルが夫テゼ王の前妻の子であるイポリットに対して抱く疑似近親相姦的恋情が、エリザベートのボブへの愛情の下敷きになっている、ということである。

同じようなことは、エヴァ・キュシネル（Eva Kushner）の『モーリヤック論』にもとりあげられている。[7] ここで指摘されるのは『フェードル』ではなく『アンドロマック』との相似性である。エリザベート、ボブに次いで副主人公ともいうべき、ポール・ド・ラ・セスクと、エリザベートの息子ピエール・ゴルナックを加えた４人の重要人物の関係が、『アンドロマック』における、オレスト、エルミオーヌ、ピリュス、アンドロマックの４人のドラマに比較される。

ラシーヌ劇では、オレストはエルミオーヌを、エルミオーヌはピリュスを、ピリュスはアンドロマックをそれぞれ愛して得られず、アンドロマックは幼い息子を通して亡き夫エクトールのみを愛している。満たされない愛の一方通行の図式である。

それと同様に、『宿命』では次のような図式が成り立つ。

エリザベートはボブを、（それとは意識せずに）愛している。

ボブは（放埒な生活を送りながら、精神的には純粋な愛情をもって）ポール・ド・ラ・セスク嬢を、愛している。

ポール・ド・ラ・セスクは、ボブの愛情を受け止め、真心をもって彼を愛している。

ここではボブとポールの間に、完全に近い愛の交流が成り立っているかに見える。それを一挙に破壊して、『宿命』を『アンドロマック』と同じ満たされない愛の図式に変えるのが、第４章に登場するエリザベートの息子ピエールである。

ピエール・ゴルナックはモーリヤックが戯曲の題名にしている「愛されぬ人たち（Les Mal-Aimés）」ということばを具現しているかのような人物である。無意識に、誰もが寵愛の対象とするボブへの嫉妬心からポールに惹かれている。母親のエリザベートに対しても、満たされない息子としての思慕を抱いている。しかし意識の上では、宗教的に合法とされる感情以外を持ち得ない、つまり「神のみを愛する」模範的な聖職者候補の学生である彼は、ボブのような不道徳の塊がポールの愛をかち取ることを許すことができない。ポールにボブの罪深さを告げて、その愛の交歓を阻止することは、ポールの清らかさを守ると同時に罪深い人生からボブを救い上げてやることでもあり、キリスト者としてなすべき善行なのである。そこで、彼はそれを実行し、成功する。ボブとポールの愛は破局を迎える。『宿命』は『アンドロマック』のような全員が「愛されぬ人たち」の悲劇となる。

第１章から３日を過ぎたゴルナック家とそのテラスで、夕方から翌日にかけての 24 時間以内に起きる、いま挙げた４人の登場人物によって、つねに３人を限度とする形で演じられる、会話中心の劇のような出来事、それが『宿命』の中心となるドラマである。小説の中心部の第５、６、７、８の４章がこれに宛てられているが、その場に居合わせる者が、自他の登場者の発する言葉によって、ことの経過を創り出して行くというこの形式は、まさにフラ

ンス古典劇の三一致の法則を彷彿とさせる。従って読者も、舞台で演じられる事柄しか知ることができない、観客席での位置を強いられることになる。

モーリヤックのすべての作品と同様、愛の交流の至難さ、不毛さをテーマとしたこの作品が、『アンドロマック』や『フェードル』に似るのは当然とも言えるが、それにしても構成の上での古典劇をこれほどはっきりと利用した作品は他にはなかなか見当たるまい。

とはいうものの、『宿命』は小説であって戯曲ではないのだから、すべては作者の「地の文（narration）」を基本とした散文での「語り（これもnarration である）」に終始することも事実である。

そこで稿者は、この作者の視点の固定化を確認するため、作者の「語り」を古典劇にはないト書きとして最小限に縮小して添えることにより、この4つの章に描かれた中心ドラマのさらに中核の部分を、劇の台本のように書き直してみたい、という誘惑に駆られたのである。成功しているかどうか、わからないが、まずはお付き合いいただければ幸いである。

劇作『宿命』３幕

登場人物

　エリザベート

　ボブ

　ポール

　ピエール

　ゴルナック老人

舞台　ゴルナック邸と外につづくテラス

第 1 幕　八月のある夕方

第 1 場　エリザベート　ボブ　ポール

（ボブにともなわれて、短いスカートのテニス服を着た断髪のポールが、田舎の主婦姿のエリザベートとの初対面の挨拶を交わしたところである）

エリザベート

　それじゃ、お自動車の故障は今日中には直せないのね。

ボブ

　ええ、ド・ラ・セスク嬢は明日の暮れ方に帰りたがっているんです。でも僕たち、夕飯はランダンの旅館でとりますよ。ゴルナック老人のお邪魔をしない方がいいでしょうから。

エリザベート

　それじゃ、お嬢さんがお泊りになる部屋の支度をしましょうね。わたしはこれで失礼して向こうへ行きますよ。お二人だけでたくさん話すことがおありでしょうから。うちの客間をお使いになってもよろしいのよ。

（ボブとポール、顔を見合わせて）

ボブ

　僕たち、暑さは平気ですから……

（と言って、ふたりはともに退場する）

第 2 場　エリザベート　ゴルナック老人（声）

（家に戻ろうとするエリザベートに向かって、窓ごしにゴルナック老人の声がする）

ゴルナック

　エリザベート！　どこにいるんだ？

エリザベート

ここですよ、お舅さん！

ゴルナック

俺は外へ出たいと思ったんだが、それがこのいまいましい暑さのお蔭でめまいがしてな。お前、テラスの先へいって、ル・ポの方角に煙が立ってないか、どうか、ちょこっと見てきてくれないか。三本目と四本目の菩提樹の間に立つんだぞ。葡萄にはいい日照りだが、松にはありがたくない天気だて。それで、もし煙が見えたら、そう知らせてくれよ。

エリザベート

いいですよ、お舅さん！

（エリザベート、舞台の前面に出て、左右を見渡す）

エリザベート（声に出して）

なるほど、ル・ポの方角に火の手が上がっているわ、五〇キロ以上向こうの方だけれど。でも、お舅さんにどういう風に話したらいいのかしら。きっとすごくショックでしょうよ。

（エリザベート、ル・ポとは反対の方角に目を向ける）

エリザベート（心の中で　内面独白）

それに引き換え、こちらの方の静かなこと。この静けさの中のどこかに、あのボブとお嬢さんが並んで横たわっているのかしら。

エリザベート（声に出して）

もしもル・ポの松林に火がついたら、二足三文で叩き売らなくちゃならない。大損害だわ。お舅さんにしらせなくちゃ……きっと気がふれてしまうわ。まったく、もう死にかけているっていうのに、そして何もかも残して死んでいかなくちゃならないのに、この世の物事にどうしてああまで夢中になれるのかしらん。

エリザベート（内面独白）

でもそれはわたしだって同じことだわ。これまで自分に当てはめたことはなかったけれど、あそこに燃えさかっている松林も結局はわたしから取り

上げられてしまう。わたしには何ひとつ残らない。ゴルナックが手押し車に積んで一杯また一杯と積み上げてきた墓場の土のなかに、いつかこのわたしも横たわるのだわ。だれもかれもみんな同じよ。あのどこか近くにいま隠れて横たわっている若者と娘だって、いつかは別れなくちゃならないのよ。あの二人だって……

エリザベート（声を出して）

あら、違うわ。それとこれとは同じじゃない！　同じじゃないわ！

エリザベート（内面独白）

どう言ったらいいのか、わからないけれど、恋愛って、ほんの束の間でも、時の支配から抜け出していられるものなのじゃないかしら。

昔、少なくとも一度、わたしも時の支配から抜け出したことがあったわ。少なくとも一度、たった一度だったけれど、生き死にだの、貧富の差だの、善悪だの、名誉と悲惨だのといったものにとらわれないで生きた覚えがある――ひとつのため息に寄りかかって、ひとりの人の肩にもたれて、そのうなじにわたしの耳をぴたりとつけて……。

エリザベート（声を出して）

ぜったい同じじゃないわ！

エリザベート（内面告白）

何が起ころうと、ラガーヴの坊やとあの娘さんが永遠の午後を味わうことに変わりはないのだわ。なんて静かな！ この静けさを作り出したのは真昼の太陽ではなくて、あの二人の沈黙が時を止め、大地を麻痺させたからなのだわ。

それにしても、今日の今日まで自分にとって必要不可欠だったはずのあれやこれやに対して、わたしがこんなにどうでもいい気持ちになるなんて、これはどうしたことなのかしら――こんな無頓着さ、なんだか気味が悪いわ。

エリザベート（声に出して）

わたし、病気なのかも……。それよりか、年齢（とし）のせいね、きっと……

（エリザベート、左手でむき出しの右腕をさすり、ついで上体を、太腿をさする）

エリザベート（声で）

　くだらないことを考えないで、お舅さんに話しにいかなきゃ。

　くだらないことはもうたくさん、たくさん。

（エリザベート、家の方にもどり、窓越しに大声で言う）

エリザベート

　お舅さん、安心なさい。ル・ポの空はきれいですよ。

ゴルナック（声）

　わしはいつも、こう思っとるんだよ。火をつけるのは羊飼いの奴らだと、な。

第3場　エリザベート　ボブ　ポール

（エリザベートは家の中にはいる。ボブとポールの笑い声が聞こえてくる。エリザベートが家から出てくるのと同時に、指をからませて歩いてきたポールとボブも登場する）

ボブ

　ひどい暑さですね。

ポール（空いた腕で唇を拭いて）

　腕が塩辛いわ。

ボブ

　それ、ぼく、知ってる。

（声を合わせて、どっと笑う）

エリザベート

　あなたたち、まだうちへはいらないほうがいいわ。ゴルナック老人に会わないほうがいいから。テラスにいらっしゃい。飲み物を何か持って行ってあげますよ。

（二人は互いに見つめ合ったまま、エリザベートに身振りで礼を言い、そのまま来た道を引き返す。エリザベートも家にはいる。彼女がオレンジエードのはいったコップを手にして、出てくると、ポールがひとりで帰ってくる）

ポール

ボブはじき戻ってきますわ。水着をとりにお祖母さまのところへ行きましたの。あたしたち、川まで車で行って、あの人は水浴びをして、それからランゴンへお食事に行くんですって。ボブがあたしを連れて戻ります。何時までに帰ってくればよろしいかしら？　12時まで許していただけます？

エリザベート

いいですよ。こんなに暑い日には、夜の冷たい空気を受けたくて、誰でも遅くなってから寝床へ行くんですから。それにゴルナック老人が眠ってしまってからのほうが、ね。門の錠は掛けずにおきますよ。犬が吠えても、こわがらないでくださいね。鎖でつないでおきますから。

（ポールは背中をむけて、その方角からボブが帰ってくるのを待つ姿勢になる。が、すぐ振り返って）

ポール

マダム、あたくし、あなたの菩提樹の下で婚約したことを、決して忘れませんわ……

エリザベート

婚約ですって！　でも、それ、ご両親は……？

ポール

ええ、難しいでしょうよ……ことに、ある方のご子息から、あたし、望まれていますので。でもお名前を申し上げるのは不作法ですわね。バザスの大地主様で、きっとご存じの方です。

そうねえ、両親には痛手になるでしょうねえ……だけど、父にしても母に

してもこれまで、自分たちの愉しみ以外のことを考えたことがありますかしら？

エリザベート

でもね、こういう場合には、ご両親だって唯々あなたとあなたの幸せだけしかお考えになりませんよ！

ポール

あたしが幸せかどうかはあたしの決めることですわ！　あなたのようにボブをよくご存じの方ならば……

エリザベート

そりゃあ、たしかにあの子はいい子ですよ。でもね、わたしならあなたの年頃で、あんな若い男との結婚には賛成しませんね。わたしはもっとどっしりした男を望みましたよ。もう出来上がった男をね。経験の豊富な、頼りになる男を……

ポール

あたしは、もう出来上がってしまった男なんて嫌い！　ボブの場合はすべてがこれからか、でなければこれから出来ていく、というところなんです。ああ！　あたくし、幻想なんか抱いていません。ありのままの彼があたしは好き……あら、来たわ！

（ボブが息せき切って駆けてくる。手に水着を持っている。それを振り回しながら）

ボブ（ポールに）

ゴルナック夫人に頼みましたか？

ポール（顔を赤らめて）

ねえ、ボブ、お願い……

エリザベート

どうしたというんですか？

ボブ

彼女は水着がないから水遊びはできないって、ひどく嫌がるんですよ。だから、ゴルナックさん、あのピエールの水着を貸してもらえるように、あなたにおねだりしなさいって、ぼく彼女に、言ったんです。首のところまですっぽりはいるすばらしい水着ですよね。まえに見たことがあるんです。ポール、あなたならきっとよく似合いますよ。

ポール

マダム、どうぞこの人のいうことをお信じにならないで……あたし、ほんの冗談で言っただけなんですから。（それ以上言わせまいと、ボブを肘でつつく）

エリザベート（憮然とした顔つきで、そっぽを向く。内面独白）

あの子の水着をだって？

ポール（その前に廻って）

あなたのご子息にお会いになりましたら、どうぞあたくしからもよろしくとおっしゃってくださいませ。去年のピクニックで、あの方とお話しできて、とても嬉しうございましたわ。社交界では、あの方のようにご立派な若い方にはめったにお目にかかれませんわ……厭ねえ、ボブ、そんなに笑うなんて……何がおかしいの？　飲んだわけじゃないでしょうに？

ボブ

飲んださ！　オレンジエードを。なぜだか知らないけど、おかしいんですよ。何か理由がなくては笑っちゃいけないんですか？　ほら、君だって笑ってるじゃないか……

ポール

ほんとにおばかさんね、あなたって！

（エリザベートはむっとして彼らを離れる）

エリザベート（内面独白）

この連中は、あの子をばかにしている。（小さく口に出して）

あの子の足元にも及ばないのに！

エリザベート（声を出して）

ボブ、走り回ってはいけませんよ。水浴びしたいんだったら……。

（そのまま、家にはいる。ボブとポールも去る）

第１幕終わる

第２幕　同じ日の深夜　月明かりの下

第１場　エリザベート　ゴルナック（声）

（エリザベート、家から出て、椅子に腰かける。わきに小さい円卓、その上にランプ。その向こうにもう一脚の椅子。手には繕い物のリンネルを持っている）

ゴルナック（声）

まだ寝に行かないのかね？

エリザベート

ええ、もう少し夜風に当たって涼みたいので。

ゴルナック

そうか、夜露に気をつけてな。昼間暑かったときに限って、寒気がするものだから。ほんとうに、寝ないんだね。門の扉にしんばりをかったかね？

エリザベート

ええ、お舅（とう）さん、心配しなくていいですよ。

ゴルナック

もしお前が風邪をひいても、注意されなかったからとは言わせないぞ。お前みたいにいつも動き回っている女が、何もしないで暗がりにつくねんと座っているなんて、何がおもしろいんだか、わしにはとんと見当がつかんよ……だが、お前だってもう子供じゃないし、な。まあ、おやすみ！

エリザベート

おやすみなさい、お舅（とう）さん。

（しばらく無言がつづく。遠くで犬の吠え声）

エリザベート（独り言）

明日もきっと暑いだろう。朝の九時から家中を閉めきってしまわなくちゃ。

エリザベート（内面独白）

あの娘は何をしているんだか。もうとっくに十時はまわったのに。あの若い二人きりで、外にいるなんて……。あの人たちは日のあるうちに小川について、ボブひとりが柳の根方で裸になって、娘の方は川岸の砂利の上に座って、彼が上がってくるのを待っていたんだろうね……。いまごろはどこに？　ああ！　わたし、どうやらとんでもないことをしてしまったらしいわ。若い娘はあんなことをしてはいけないのだわ。わたしの若かったころなんか、娘はひとりでいてはいけなかった。いつも誰かに見張られていたものだわ。

あの娘が帰ってきたら言ってやろう。もう二度とここへは足を踏み入れないで頂戴って。あの娘、明日は帰るんだわ。さようならだわ！

第２場　エリザベート　ピエール

（足音が聞こえる）

エリザベート（急いで繕い物を椅子に置きながら）

やっとあなた、帰っていらしたんですね！　わたし、心配しはじめていたんですよ。

ピエール

ぼくのこと、〈あなた〉だって？　母さん。

エリザベート

あら、ピエール、あんたなの？

ピエール

ほかの誰を待っていたのさ？

エリザベート

でもなんだってこんな時間に？　終列車はかれこれ一時間も前に着いたでしょうに。

ピエール

ぼくはこの暑さのなかを一日中旅してきたんだぜ。だから月に照らされて歩きたくなったのさ。荷物は駅においてきた。そして葡萄畑を抜けて歩いてきたってわけさ。

エリザベート

どうして、何時帰ってくるか知らせてくれないんだろうねえ。そうすれば誰にだって、ずっとことは簡単だろうに。お前はそうするのが面倒臭いんだね？

ピエール

もう、お説教か！

エリザベート

そうじゃないよ、ねえ、わたしが言うのはあんたのためを思ってのことだよ……何か軽い料理（もの）でも用意しておけばよかった。晩御飯は食べたの？　それじゃあもう寝たいだろうねえ？　くたくたに疲れてるだろうから。（ピエールをじろじろ見まわして）

とにかく少し洗ってきれいにしておいでよ。

ピエール（不愛想に）

ああ、そうしないと、抱いてもくれなさそうだから。

エリザベート（急いで顔を息子の顔に近づけて）

おばかさんだね、この子は！　まあ、なんて背が高いんだろう。また伸びたみたいだね。

ピエール

五年前に1メートル80になったのさ。帰ってくるたびに言わせないでくれよ。もうこれ以上は伸びないよ。

エリザベート

まあまあ、お掛けな。咽喉が乾いていないかい？

ピエール

ううん。

エリザベート

お腹（なか）は？

ピエール

晩飯はすんだと言ったじゃないか。

エリザベート

いい旅行だったかい？　咳は出なかった？　鼻血は？

ピエール（歩きまわりながら、内的独白）

母さんはぼくの体のことしか考えない。関心があるのはそれだけなんだ。

ピエール（声を出して）

母さん、ぼくの講演（プレゼン）がうまく行ったかどうかは、訊かないの？

エリザベート

怒りっぽい子だね！　それじゃ、訊きますよ。あんたの講演（プレゼン）はうまく行きましたか？

ピエール

上々の首尾さ。リモージュではぼく、共産主義者（コミュニスト）と議論になったんだけど、彼の主張を根底から覆したよ。彼はあとで握手を求めて来たよ。アンジェルの王党派（ロワイヤリスト）の方がもっと手ごわかった……

エリザベート

そう！　でも、まあ腰かけなさいよ、あんたがぐるぐるまわってばかりいるから……わたし気分が悪くなってしまうわ。とにかくオレンジエードでも持ってきてあげようか？

ピエール

もらってもいいな。（椅子に腰かける）

（エリザベートが家にはいらないうちに）

ピエール

ところで、母さん……、ラガーヴの息子がお祖母さんのところに来てるの？

エリザベート（片手をドア・ノブにかけたまま）

どうしてそんなことを訊くの？

ピエール

なぜって、ぼくがテラスの下のところで、この目でウサギを掴まえるみたいにとらえたのがあいつだったら、そいつは女の子を庭に引っ張り込んだんだけど、もしそうだったら、ぼくはあの汚らわしい奴にひとこと言ってやらなくちゃならないんだ。それも明日の朝までに、さ。お祖母さんのところにいるのも、いかがわしいことをするためだろうから。

エリザベート

ピエール、あんたは何でも物事を最初（はな）から悪くとってしまうのね。すぐに悪いことにばかり気が付くのね。人を裁くのはやめましょうよ。私たちは裁判官じゃないんだから。

ピエール（驚いて）

だって、ママン、ありゃ悪党だぜ！　母さんだってぼくと同じに、よく知ってるじゃないか……それより、いや、母さんは知らないんだな……ぼくほど知ってはいない、ってことだ。

エリザベート

あんた、何を知ってるって言うの？

ピエール

パリでね、ぼくはうんと知ってることがあるよ。有難いことに、ぼくのいる環境はあの美男紳士がそこでご発展の環境とは交流のないところだけれど、それでもやはり、いろんなスキャンダルが耳にはいってくるのさ……奴は有名だよ、わが隣人は！　ある日ぼくは友達がほかの青年のことを批評して「つまりありゃ一種のボブ・ラガーヴさ」と言っているのを聞いた

よ。ああ、だめだめ、可愛そうな母さん、母さんみたいな聖なるご婦人は到底それがどういうことを意味するか、わかりっこないよ。

エリザベート（憤然と）

あの子が中傷されているんじゃないと誰が言えるの？　あの子はそんな悪者（わるもの）には見えないよ。そりゃあ、あれだけの二枚目だもの、沢山、女を泣かしてきてはいるだろうよ。それにわたしの想像だと、パリのそうした社交界（とこころ）では、泣かされた女が復讐をする形は決まっているのさ。

ピエール（指をぽきぽき鳴らしながら）

ふん、ばからしい。

エリザベート

何がばからしいの？　ピエール、お願いだから、指をそんな風に鳴らさないでよ。いらいらしてくるから。

ピエール

はてさて、ヴィリディスくんだりまでやってきて、ぼくの母上が頌歌（ほめうた）を奏でるのをきかなくちゃならないとはね。それも、あの……あの……

（ピエールは歩き回り最後に椅子にどかんと腰をおろす）

エリザベート（息子の両手をとって）

ねえ、ピエール、この話の要点はいったい何なの？　わたしたち、同じ考え、同じ信仰を持っているって、あんたよく知っているじゃないの？

ピエール

いや、いや！　あなたはほかの女と同じだよ。そう、プリューダン・ゴルナック夫人（さん）、キリスト教母の会の会長さん、あなたは放蕩者に慈悲深いんだ。道楽者の若い衆に惚れてるんだよ……！

エリザベート

ピエール、お願いだから！

ピエール

しかもあなたは自分が信心深いと思っている。あなたは罪とはどういうも

のか、知っているつもりでいる。だけど、実際は知っちゃいない……人生における唯一の関心が他人を誘惑して、堕落させ、破滅させることにあるような若者は、人殺しだ。いや人殺しよりもっと悪い！

エリザベート

ちょっと、聞いてよ。あんたの言うとおりでしょうよ。だけどお願いだからそんなに興奮しないで。わたし、怖くなってしまうわ。

ピエール

わかったよ。ぼくのことをいかれてると言うがいいさ。のぼせてる、とも言ったらいい。いつもやるように、鹿の子草の煎じ薬かアスピリン一錠を熱いハーブティーで飲んで、眠るように努力しろってすすめたらいいよ。ああ、ぼくは知ってるさ、母さんはぼくの体のことしか心配しないんだ。身体の健康しか頭にないんだ。宗教だって、あなたにとっては安息と慰安をもたらすものでしかないんだよ。

エリザベート（つとめて冷静に）

ねえ、ピエール、こっちを見て頂戴。わたしを見て欲しいのよ。（と言って両手で息子の顔を抱える）

（ピエールの両眼から涙が降り落ちる）

エリザベート（やさしく）

なにがそんなに悲しいの？

（エリザベートはピエールの髪を撫でる、しかし眼はあらぬ方を見ている）

（気分が落ち着いたピエールはハンカチで顔を拭き、鼻をすすりながら立ってまた歩き始める）

エリザベート

あらまあ、もうそろそろ11時じゃないの！　燭台は玉突き室のテーブルの上に置いて行っていいわ。あんた、まだ寝ないの？

ピエール

ああ、ぼくはもう少し起きてるよ。なんだかたいへん落ち着かなくて……

眠れそうもない……

エリザベート（そわそわしながら）

じつはねえ、わたしもまだ寝られないんだよ。わたし、何を考えていたんだろう？　今日はここでちょっとした事故があってね。あんたに話すの、忘れていたけれど……

ピエール（それは聞かずに）

おかしいな、誰か道を歩いてる、こんな時間に。ほら、たしかに……。笑い声がする。もしもそれが、あれだとしたら、あんまりひどい……（戸外の暗闇にむかって）

そこにいるのは誰だ！

第3場　エリザベート　ピエール　ポール

ポール（声）

あたしがおわかりにならない？　ゴルナックの奥様がお話しになりませんでした？

（そう言いながらポール登場する）

エリザベート

（ピエールに）それっていうのが、ねえ。つまりわたしがあんたにヴィリディスの出来事を話そうとして口を開く前に、わたしたち口喧嘩になってしまったのさ。あんたはここじゃ何事も起こらないと思っているんでしょうけれど、じつはうちの前で自動車事故があってね。運のいい事故だよ！そのおかげでこのお若い従妹（いとこ）とお近づきになれたのだから。以前、あんたはこの方のことをたいそうお誉めだったねえ。

ピエール

どんな自動車事故です？

エリザベス

つまりこうさ。ド・ラ・セスク嬢（さん）の自動車が……

ポール

失礼ですけど、奥様、あなたは嘘のつきかたをご存じありませんのね。嘘には慣れていらっしゃらないのよ！　お宅の坊ちゃまがこの場の事情を飲み込んで、そして許してくださる……くらいの年齢に達しているとはお思いにならないんですの？　そうですわ、ヴィリディスにはある人がいて、あたくし、どうしてもその方にお会いする必要がありましたの。お宅のお母様はたいへん善い方で、ここのお庭であたしたちを会わせてくださったんですわ。

あら！　いやですわ、ムッシュウ、（おどけて怖がる身振りをして）そんな怖いお顔、なさらないで！　誓って申しますけど、いたって無邪気なランデヴーですのよ……

ピエール（神経質なけたたましい笑い声を立てる）

悪いが、ぼくは疑問を抱きますね。無邪気ですって？

われわれの名誉隣人みたいな人物と無邪気なランデヴーを、ですって？

失礼ですが、この際無邪気を云々するのは……

ポール

まあ、よしてくださいな。もうそれ以上おっしゃらないで……

（外套のかくしから鼈甲のシガレット・ケースをとりだし、タバコを一本抜き取って、ランプで火をつけ、一服吸い込んでから、語気を強めて）

あなたがこれ以上へまをなさらないように、申し上げますわ。私たち婚約していますの。

ピエール

あなたが？　あなたがあのボブ・ラガーヴと婚約したって？

エリザベート

フィアンセ同士でなくては、わたしが第一承知するはずが……

ピエール

あなたがボブ・ラガーヴと婚約を？　ご冗談でしょう。からかっちゃいけ

ませんよ。

ポール

ほら、ね。それがあなたたち民主主義者（デモクラート）の地金よ！　あたし、去年のピクニックのとき、あなたが聞かせてくださったことをみんな覚えていてよ。人民大学とか、階級統一とか、ずいぶんご立派なごたくをならべていらしたわね！　そのくせ、ひとりの娘が社会的地位の違う青年と結婚しようとすると、真っ先にスキャンダル呼ばわりをするんだから！　ヘボ役者ね！

ピエール

あなたはわざとぼくの言うことがわからない振りをしているんだ。ロベール・ラガーヴがあなたに相応しくないと思えるのは、何も彼が百姓の孫だからっていうわけじゃあない。そのくらいなら、むしろあなたがヴィリディスの肉屋の小僧と結婚する方がいいと思うね。そうさ、そのくらいならむしろ……

エリザベート

ピエール、お前、気でも狂ったの？（息子の腕をつかむ）

ピエール（それを振り払って）

いや、気が狂ってなんかいないよ。何度でも繰り返して言うけど、あなたの結婚の相手としては、どんな卑しい身分の人間の息子でも、まだよっぽどましだ。選りにもり選ってなにもあんな……

ポール

ラガーヴ青年（さん）がいったいあなたにどんなことをしたというの？　もちろん彼は猫かぶり聖人というわけじゃないわ。そりゃあ恋愛事件（アヴァンチュール）だっていくつかあったでしょうよ……でも、それがどうしたとおっしゃるの？　彼からすればそれも勲章だったのじゃない？　よろしかったら放蕩と言ってもいいことよ。そんなこと、あたし、気にしていませんわよ。

ピエール

そりゃ、気にしちゃいないでしょうよ。あなたたち、女はみんな似たり

よったりなんだ。（腕をふりまわす）

エリザベート

もっと低い声で話しなさいよ。お舅さんが起きちまうじゃないの！

ピエール（少しだけ声を低め、それだけ怒りをこめて）

そうです。ぼくは今しがた母にその話をしていたところなんです。あなたたち女は独立自尊の男子、理想や信念を持つ男子よりも放蕩者を好むんだ。あなたたちによると、放蕩だけが若者たちの関心の的だということになる。いろいろ偉大な目的に熱中する崇高な人々を知らないんだ。そういう人々こそ、優しさや忠実さや細やかな気遣いの何たるかを知っている。女性を尊敬し、崇拝し、辱めない人たちなのに。

ポール

まあ、あなた、大した雄弁家ねえ！

ピエール

可笑しいと思いますか？

ポール

いいえ。あなたのおっしゃることには幾分か真実が含まれていますわ。そうね。（内省的な表情で）たいていの女性はほとんど男性の道徳性には注意しませんわ。多分彼女たちにしてみると、男性の尊敬を享受するにはそれ相応の努力をしなくてはならないからだと思います。ありていに言えば、わたしたちって、望まれ、求められ、追いかけられたいんですわ。うまれながらの餌食、獲物なのね……そんなに歩きまわらないで、さあ、椅子におかけになったら？　友好的にお話ししません？

（ピエールは腰かけるが、がたがた体が震えている。脚の震えにつれてランプを載せた円卓が揺れる。手をごしごしすり合わせるが、おさまらない）

ポール（ピエールに煙草ケースを差し出すが、彼は断る）

まあ！　煙草もダメ？　もう列聖（カトリックの聖人にあげられること）を考えていらっしゃるのね。……あら、冗談よ。そんなに怖い顔をなさ

らないで。あたしの言うこともお聞きになってよ。あたし、ボブについて何も幻想なんて持っていませんのよ。あたしは彼をよく知っています。彼の生活している環境が悪いんですわ。あの人はあの容貌と眼差しの犠牲者なの……さっき、獲物って申しましたでしょう？　可哀そうに！　彼はその獲物の一人なのよ。あたしにはそれがわかっていますの。だって彼はあたしを避難所として、唯一の隠れ家として、愛しているんですもの。あの人はあたしに幾度もそう言いましたわ……幾度も、彼はあたしに、未来の日々の話をしてくれ、と頼むんです。彼がもう今のような魅力も若さも失ってしまったとき、それでもまだあたしのなかに、変わらない静かな愛情を見出せるか……なぜ、お嘲笑（わらい）になるの？

ピエール（憤怒のあまり、立ち上がって）

だから、ぼくは何度でも言うんだ、あなたは彼を知らないって！　……悪行につぐ悪行なんだよ！　何度でも言うさ、あなたは彼を知らない。あなたがどんなに偏見を持たない人であったにしても、結局あなたは若い娘なんだから、知ることができないんですよ。

ポール（椅子から立ち上がって、ふらふらと前方へ歩き出す。月の光がその苦痛にゆがんだ表情を映し出す。静かになったピエールの方を向いて）

それならどうぞ。言ってご覧なさいな。

ピエール（立って、後ずさりしながら）

けっきょく、ぼくはあなたに忠告しただけです。それ以上はぼくには関係ありません。……夜の空気は香ばしいですね。

ポール

あなたは言いすぎておしまいになった。でなければ、言い足りないのよ。お終いまでおっしゃらなければいけませんわ。あたくし、ぜひともうかがいます。

（ピエール、首をふる）

エリザベート

もう真夜中ですよ。さあ、もうみんな寝ましょうよ。明日の朝になれば、こんな話なんか全部忘れてしまいますよ……

ポール

いいえ、奥様、あたし、こんな仄めかしの数々を記憶にためこんで、この先生きていくことなんかできそうにありませんの。さあ、あなた（ムッシュー）、はっきりおっしゃってください。うかがいますから。

エリザベート

わたしは、ピエール、あと一言も言うなと命令しますよ。

ポール

あたしはね、奥様、この方がすべてをおっしゃらないうちは、ここを離れませんわ。今度こそ、あたし、知りたいのです、どうしても。（目を伏せて、内面独白）

あれはこの春、ヴェルサイユのグラン・カナール沿いに車を走らせていたときだった。ハンドルを握るボブの手に、わたしが唇を触れようとしたときだった。まるであたしの口が火を噴いたかのように、あの人はその手を引っ込めた。自動車が滑ったのにも構わず、言ったのだ「いけない、いけない、あなたはぼくの手などに接吻してはいけない」「ポール、きみはぼくを知らない。きみはぼくがどんな人間だか知らないんですよ」あれはどういう意味だったのだろう。ピエール・ゴルナックの言うことは、どうせ詰まらない醜聞だろう。でも、あたしはあのとき心の中にはいり込んだ疑問を根こそぎ取って、捨ててしまいたい。そのために、ピエールに何もかも喋らせよう。

（声を出して）

おっしゃって頂戴な、ピエールさん、あなたの嘘のすべてを。

ピエール

嘘？　嘘だと？　よろしい。それじゃ、お聞きなさい。しかし、ぼくはあなたに警告します。あなたは必ず苦しみますよ。それに忘れないでくださ

い、あなたがぼくに話すことを強要したのだってことを。

ポール（否定するように首を振る）

ピエール（それにおっかぶせて）

強要したのは、あなたですよ、いいですね。（エリザベートに）

母さん、ぼくはあなたの前では喋れないんだ。お嬢さん、テラスの先まで歩いて行きませんか。外はこんなに暖かいし。

エリザベート（ポールに外套を着せながら）

ちゃんと温かくしていらっしゃいよ。（小声で）

ここにいらしたら、どう？　……あなた、他人の言うことを気になさるの？

わたしはあの子を子供のころから知っていますよ。いい子ですよ。かわいそうな子……

ポール

……かわいそうな子……

（ポール、うつむいてしばらくじっとしている。顔をあげて、エリザベートに答えようとした瞬間）

ピエール

来るんですか、来ないんですか？

ポール

行きますわ。

（ポールとピエール、姿を消す。エリザベートもランプの油を足しに、家に入る。誰もいない舞台に、男女の言い争う声や、犬の遠吠えが聞こえる。しばらく時間が経ったという前提で、第４場が始まる）

第４場　ピエール　ポール　エリザベート

（暗がりの中を、ピエールが、その後ろからポールが帰ってくる）

ピエール

何も見えやしない。母さん、もう油が切れたの？

（エリザベート、明るいランプを手にして出てくる。その光に照らされたポールは、先ほどとは打って変わったようにしょんぼりとして、老け込んだように見える）

エリザベート（内面告白）

あら、この娘、泣いていたみたい。

ピエール（ポールに）

むろん、こうした事柄には、誰も明確な証拠をつかむことなんかできませんよ。多くの意見が一致しているってことは、十分な証拠になりますが、個人的穿鑿が一番ですよ。それに、ぼくはもし自分が間違っていたとわかったら、そのほうがずっと嬉しいんだし……

ポール

お願い。あたしをそんなに追い詰めないで。お願いですから。そして、ほんの少しの間でもいいから、黙っていてくださらない？　耳が聞こえなくなりそう……

（ピエール、棒立ちになる。それに代わってポールが歩きまわり出す。外套を体にまといつかせながら、ぐるぐるとその場を歩きまわる）

エリザベート（ランプをピエールに渡しながら）

今夜はもう疲れているだろう、さあ、お休みよ……さあ……

ピエール（ポールが椅子に倒れ込むように腰を下ろすのを待って）

ぼくは、善かれと思ってやったことです。ぼくは自分が正しいと思います。あなたはあとで僕に感謝しますよ。あれはぼくの義務だったんです……

エリザベート

そう、そう、そうだとも。お前はお前の義務を果たしたのさ。お前はいつでも義務を果たすんだよ。さ、もう寝にお行き。

ピエール

それに、マドモアゼル、あなたですよ、せがんだのは……

ポール（エリザベートをまっすぐに見て）

あの方に、この場を去らせてください。いなくなるように、おっしゃって。（ピエール、家にはいる。その足音が聞こえなくなるのを待って、ポール、堰を切ったように泣き出す。エリザベートはその身体を抱いて、うなじを撫でてやる）

ポール（少し落ち着いて）

あたし、よく知っているんです、ボブがどういう風にしてお金を稼いでいるか。彼が装飾した家もみましたわ。ああいう仕事は、いまどき、とてもいいお金になるんですの。でもそれはいつもお得意先の気持ち次第だ、とも言われていますわ。たしかに、彼に仕事をさせてくれるのは、お金持ちの友達です。彼がとても裕福な婦人や殿方と知り合いなのは幸せなことですわ。彼の職業では、最高の贅沢に慣れている人たちとでなければ、仕事にならないのですもの……。（突然）あなたの息子さんが繰り返し言われたのは、恐ろしいことなの。あの方は周知の事実だっておっしゃったわ。あの方は……あの方は（わっと泣き出し、あとを続けることができない）

エリザベート（彼女を抱きしめたまま、ハンケチを取り出して、涙をふいてやり）

かわいそうに。もうその先は聞きたかありませんよ。もうあの哀れなピエールの言ったことなんか、ひとことだって聞くつもりはありませんよ。さあ、こっちをご覧なさいな。そんなにかぶりを振らないで。わたしの言うことをお聞きなさいな。なんでもありゃしませんよ。わたしはそんなこと、思ったこともありません。どうしたら、おわかりになるかしら……？　ねえ、聞いて！　ボブのような人が、どんな生活をしていたとしても、ほら、あなたは彼をよく知っているでしょう？　あなたは有りのままの彼を、ほんとうの彼を愛しているんでしょう？　それじゃどうして、特別な欠点とか良くない傾向とかを切り離す必要がありますか？　ああ、わたしがこんなに深く感じていることを、あなたにわからせられないのが残念

ですよ。ね、わたしはまるでボブをわが子のように弁護していますでしょう？　……たぶんあなたはわたしを寛大すぎるとお思いでしょうけれど、ね。でも、わたしにはそう思えるんです。わたしたちは、心を奪われている人については、どんな点でも否定すべきではないって。もしもボブがほかの人からひどいことを言われる、かわいそうな不幸せな子でなかったら、あなたの愛する人ではなかったでしょうよ……

ポール

それでは、奥様、あなたもそうお思いになるんですの？　お認めになるんですの？　彼の生活にはたくさん過ちがあるって……

エリザベート

わたしはなにも考えません、なにも認めませんよ。……でもなぜそれがあなたにはそんなに気になるんでしょうねえ？

ポール（驚いて）まあ、あなたの息子さんが聞いたら、なんておっしゃるかしら？　愛する人を軽蔑することができますか？　尊敬できない相手と結婚できますか？

エリザベート（少しどぎまぎしながら）

でも、愛している以上は……！　愛がすべてではありませんか。ほかの残りは全部そこに含まれてしまうのでは？　少なくともわたしはそう思いますよ。愛する人を尊敬するって……そのことばがなぜわたしには空々しく響くのか、わたし、説明できませんけど。よく考えてみなくてはなりませんね。人を愛するからには……

ポール（それを聞かずに）

あたくし、決めました。夜が明け次第、すぐここをおいとまします。そしてもう、ボブには会いません。

エリザベート

えっ、もう会わない？

ポール

いいえ、しばらくの間、という意味です。あたしはただ、ちょっとした質問をしなくてはなりませんの。2，3本手紙を書いて。2，3の点についてはっきりさせたいのですわ。それからでないと、彼の顔が見られないのですわ。

エリザベート

あらまあ、あの子をそんなひどい目に合わせるなんて、本気で？

ポール

あたしのほうだって、悩まないとお思いになります？　だとしてもあたしは自分がこれから結婚しようとする相手を知りたいんです。

エリザベート

愛している以上、あなたは彼をよく知っているんですよ。昔、ここにたいへん立派な、学問もおありの、ご親切で思慮深い司祭様がいらっしゃって、ね。みんなとても尊敬していたんですが、ある日のこと、スキャンダルが発覚して、他所へ移されることになったんです。なんでも相当な醜聞だったそうですわ。みんな、とりわけわたしなんか大声で「なんて破廉恥な偽善者だったんだろう！　慈悲深そうな顔をして、わたしたちをうまくだましていたんだ」と言ったものですわ。それが、この頃になって、やっとわたし、合点が行ったのです、あのお気の毒な神父様はわたしたちをだましていたわけじゃない。あの方は実際、見ての通りの、親切で、同情深くて、利己的でない方だったのだ……でも、同時に、悪いこともできる方だったのだ、と……

ポール

そのお話、あたしとどんな関係がありますの？　分かりませんけど……

エリザベート

ごめんなさい。なぜこんなことをお聞かせしたのか、自分でもわかりませんわ。……つまり、ね。あなたがなにかを見つけられたときのための老婆心なんですわ、あなたの婚約者（フィアンセ）の暮らしのなかに……

ポール

婚約者（フィアンセ）ですって？　まあ！　まだですわ、奥様。

エリザベート（まじまじとポールを見つめてから、家にはいり、便箋と封筒、ペンを持ってきて、円卓に置く）

また来ると、お書きになるんでしょうね。

ポール

もちろんですわ、マダム。

エリザベート

日を定めますか？　確かでないと、あの子にはとても辛いでしょうよ。それにまだ体が治りきっていないし。

ポール

3週間ではどうでしょう……

エリザベート

3週間ですって？　あなた、どうかしておいでですよ！　2週間でも長すぎるくらい……

ポール（手紙をしたためて封筒に入れ）

さあ、すんだわ。これを彼に渡して頂けます？　あら、ごめんなさい、奥様、あたし、封をしてはいけなかったのですわね。気がつきませんでした。それから、あたし、夜明けまで少し休ませて頂きますわ。いいえ、起こされるの、嫌いですから。眠れないことは確かですし、それにもうじきに朝が来ますわ。

エリザベート

お発ちになる前に朝ごはんを召し上がらなくては……何か温かいものでもお飲みにならないと……

ポール（身振りでそれを断る）

エリザベート（ポールの額にキスをして、先に立って家にはいる。すぐにひとりで出てくる。円卓の後ろにひざまずいて、十字を切り、夜の祈りを唱え

始める）

聖霊よ、来たりて忠実なる僕（しもべ）の心を満たし、御身の聖（きよ）き愛の火によりて、そを照らしたまえ。御前にひれ伏して、御身を知り、御身を愛し得る心を与えたまいたるを感謝し奉る。……あの娘は彼を愛していると言ったのに、彼とは会わないで行ってしまおうとしている。自分が愛されていることを知っているのに、その幸福をちゃんと抱いているのに、あの青年が今まで他の人々にたいそう可愛がられ、あまやかされるままになっていたという、それだけの理由で、行ってしまうのだ。それなのに、あのおばかさんたら、彼女にまだ愛されていると思っている……お赦しください、神様、あなた様おひとりのことだけ考えなくて――**われらの良心を糺さん。神を賛美したるのち神に願わん**……ポールが発つまえに、ボブに知らせることはできないかしら？　もし彼女が彼に会えば、彼なら彼女を引き留めることができるはずだわ。彼に会いさえすれば、彼女は思い返すだろう。彼が会いに来るまで、わたしが彼女をひきとめておければ……。彼を見たら、その瞬間に、彼女は気持ちを変えるだろう。よく考えなくては。でもまずお祈りをすませなくては。**神よ、いと高きところにいます御身に逆らいて犯したる数々の罪を、われいま心より悔やみ、御赦しを希（こいねが）い奉る。**あの娘は出かけられるようになり次第出発するだろう。夜が明けたら、なにか口実を作って、マリア・ラガーヴのところへ行かなくてはならない。でも、なんと言ったものかしらん。あの山羊婆さんときたら、いろんなことに気を回すから……**今夜にも死が襲わぬとはなき不安に囚われつつ、ああわが神よ、御手にわが魂をゆだね奉る。御怒りのうちにそを裁きたもうなかれ。**……なんと言ったら、朝の５時にあの婆さんを外へ追い出せるかしら？　**されどわが過去に犯せる数々の罪を、すべて何卒赦したまえ。われ、それら諸々の罪を憎み、いまわの際まで御身に忠実に、御身のためにのみ生きんと念願し奉る。**……お祈りを唱えながら、こんなことを思いめぐらすなんて恥ずかしいことだわ。いい気になったことの報いだわ。こう

いう抜き差しならない状況には、小指一本突っ込んだだけでも……あの二人はとにかく、抜け出さなくちゃいけない！　どこまで唱えたかしら？**天にましますと神とともに座したもう聖人聖女よ**……いやここは飛ばそう。**われを守り、われを助けんがため、神より遣わされし守護の天使よ**……それにしても、マリア・ラガーヴになんと言ったらいいか、口実が見つからないわ。結局のところ、よほど早起きしないと……

（祈り続けているエリザベートを残して……幕）

第２幕終わる

続いて本編のクライマックスである第３幕、ピエールとボブの対決の場が始まるのだが、「教養論集」に規定された予定の枚数が尽きてしまった。以下終幕までは次回、おそらく2024年度の「論集」にまわさざるを得ない旨、ご了承いただければ幸いである。

注

1）*Destins*　Paris. Grasset. 1927
Œuvres romanesuques et théâtrales complètes（ORTC）Ⅱ pp.107~210.
原百代訳『宿命』モーリアック小説集　Ⅴ　目黒書店　1951
2）Notices par Jacques Petit. ORTC Ⅱ p.995
3）Jean Paul Sartre：*M.François Mauriac et la liberté*　la N.R.F fev. 1939
Situation Ⅰ pp.36~37
4）Sartre：Situation Ⅰ p.96
5）『フランス文學研究』日本フランス文学会　1959　pp.96~104
6）Notices par J.Petit. ORTC Ⅱ pp.992~993
7）エヴァ・キシュネル　浜崎史郎訳『モーリアック』　作家と人間叢書　ヨルダン社　1975　pp.105~109

（続）

（なかじま・こうこ　元農学部教授）